

[B年] 降誕前第6主日(2021年11月14日)**【旧約聖書日課】 出エジプト記6章2～13節**

²神はモーセに仰せになった。「わたしは主である。³わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに全能の神として現れたが、主というわたしの名を知らせなかった。⁴わたしはまた、彼らと契約を立て、彼らが寄留していた寄留地であるカナン土地を授けると約束した。⁵わたしはまた、エジプト人の奴隷となっているイスラエルの人々のうめき声を聞き、わたしの契約を思い起こした。⁶それゆえ、イスラエルの人々に言いなさい。わたしは主である。わたしはエジプトの重労働の下からあなたたちを導き出し、奴隷の身分から救い出す。腕を伸ばし、大いなる審判によってあなたたちを贖う。⁷そして、わたしはあなたたちをわたしの民とし、わたしはあなたたちの神となる。あなたたちはこうして、わたしがあなたたちの神、主であり、あなたたちをエジプトの重労働の下から導き出すことを知る。⁸わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに授けると手を上げて誓った土地にあなたたちを導き入れ、その地をあなたたちの所有として授ける。わたしは主である。」⁹モーセは、そのとおりにイスラエルの人々に語ったが、彼らは厳しい重労働のため意欲を失って、モーセの言うことを聞くとはしなかった。

¹⁰主はモーセに仰せになった。¹¹「エジプトの王ファラオのもとに行き、イスラエルの人々を国から去らせるように説得しなさい。」¹²モーセは主に訴えた。「御覧のとおり、イスラエルの人々でさえわたしに聞くとはしないのに、どうしてファラオが唇に割礼のないわたしの言うことを聞くでしょうか。」¹³主はモーセとアロンに語り、イスラエルの人々とエジプトの王ファラオにかかわる命令を授けられた。それは、イスラエルの人々をエジプトの国から導き出せというものであった。

【使徒書日課】 ヘブライ人への手紙11章17～29節

¹⁷信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクを献げました。つまり、約束を受けていた者が、独り子を献げようとしたのです。¹⁸この独り子については、「イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる」と言われていました。¹⁹アブラハムは、神が人を死者の中から生き返らせることもおできになると信じたのです。それで彼は、イサクを返してもらいましたが、それは死者の中から返してもらったも同然です。²⁰信仰に

よって、イサクは、将来のことについても、ヤコブとエサウのために祝福を祈りました。²¹信仰によって、ヤコブは死に臨んで、ヨセフの息子たちの一人一人のために祝福を祈り、杖の先に寄りかかって神を礼拝しました。²²信仰によって、ヨセフは臨終のとき、イスラエルの子らの脱出について語り、自分の遺骨について指示を与えました。

²³信仰によって、モーセは生まれてから三か月間、両親によって隠されました。その子の美しさを見、王の命令を恐れなかったからです。²⁴信仰によって、モーセは成人したとき、ファラオの王女の子と呼ばれることを拒んで、²⁵はかない罪の楽しみにふけるよりは、神の民と共に虐待される方を選び、²⁶キリストのゆえに受けるあざけりをエジプトの財宝よりまさる富と考えました。与えられる報いに目を向けていたからです。²⁷信仰によって、モーセは王の怒りを恐れず、エジプトを立ち去りました。目に見えない方を見ているようにして、耐え忍んでいたからです。²⁸信仰によって、モーセは滅ぼす者が長子たちに手を下すことがないように、過越の食事をし、小羊の血を振りかけました。²⁹信仰によって、人々はまるで陸地を通るように紅海を渡りました。同じように渡ろうとしたエジプト人たちは、おぼれて死にました。

【福音書日課】 マルコによる福音書13章5～13節

⁵イエスは話し始められた。「人に惑わされないように気をつけなさい。⁶わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。⁷戦争の騒ぎや戦争のうわさ聞いても、慌ててはいけない。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない。⁸民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、飢饉が起こる。これらは産みの苦しみの始まりである。⁹あなたがたは自分のことに気をつけていなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で打ちたたかれる。また、わたしのために総督や王の前に立たされて、証しをすることになる。¹⁰しかし、まず、福音があらゆる民に宣べ伝えられねばならない。¹¹引き渡され、連れて行かれるとき、何を言おうかと取り越し苦労してはならない。そのときには、教えられることを話せばよい。実は、話すのはあなたがたではなく、聖霊なのだ。¹²兄弟は兄弟を、父は子を死に追いやり、子は親に反抗して殺すだろう。¹³また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

出エジプト記 6章2～13節

²また、神はモーセに告げた。「私は主である。
³私は、アブラハム、イサク、そしてヤコブに全能の神として現れたが、主という私の名は彼らに知らせなかった。⁴私はまた、彼らと契約を立て、カナンの地、彼らがそこにどどまっていた寄留地を与えることにした。⁵私はまた、エジプト人が奴隷として働かせているイスラエルの人々の呻き声を聞き、私の契約を思い起こした。⁶それゆえ、イスラエルの人々に言いなさい。『私は主である。わあなたがたをエジプトの苦役の下から導き出し、過酷な労働から救い出す。またあなたがたを、伸ばした腕と大いなる裁きによって贖う。⁷私はあなたがたを私の民とし、私はあなたがたの神となる。あなたがたは、私が主、あなたがたの神であり、あなたがたをエジプトの苦役の下から導き出す者であることを知るようになる。⁸私は、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓った地にあなたがたを導き入れ、それをあなたがたに所有させる。私は主である。』⁹モーセはこのようにイスラエルの人々に語ったが、彼らは落胆と過酷な労働のために、モーセの言うことを聞くとはしなかった。

¹⁰主はモーセに告げられた。¹¹「エジプトの王ファラオのもとに行って、イスラエルの人々を国から去らせるように言いなさい。」¹²モーセは主の前で言った。「御覧ください。イスラエルの人々でさえ、私の言うことを聞きません。どうしてファラオが話し下手の〔直訳→唇に割礼のない〕私の言うことを聞くのでしょうか。」

¹³主はモーセとアロンに語り、イスラエルの人々をエジプトの地から導き出すために、イスラエルの人々とエジプトの王ファラオに対してなすべきことを命じられた。

ヘブライ人への手紙 11章17～29節

¹⁷信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクを献げました。つまり、約束を受けていた者が、独り子を献げようとしたのです。¹⁸神はアブラハムに、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれる」と言われました。¹⁹アブラハムは、神が人を死者の中から復活させることもおできになると信じたのです。それで彼は、イサクを返してもらいました。これは復活を象徴しています。²⁰信仰によって、イサクは未来のことについても、

ヤコブとエサウを祝福しました。²¹信仰によって、ヤコブは死に臨んで、ヨセフの息子たちの一人一人祝福し、杖の頭に寄りかかって礼拝しました。²²信仰によって、ヨセフは臨終のとき、イスラエルの子らの出て行くことを思い、自分の骨について指図しました。

²³信仰によって、モーセは生まれてから三か月間、両親によって隠されました。彼らがその子の美しいのを見、また王の命令を恐れなかったからです。²⁴信仰によって、モーセは成人したとき、ファラオの娘の子と言われるのを拒んで、²⁵罪のはかない楽しみにふけるよりは、神の民と共に虐げられるほうを選び、²⁶キリストのゆえに受ける辱め〔別訳→キリストの受けられた辱め〕をエジプトの宝にまさる富と考えました。与えられる報いに目を向けていたからです。²⁷信仰によって、モーセは王の怒りを恐れず、エジプトを去りました。目に見えない方を見ているようにして、揺らぐことがなかったからです。²⁸信仰によって、モーセは、滅ぼす者が初子たちに触れることのないように、過越を行い、血を塗りました。²⁹信仰によって、人々は乾いた陸地を通るように紅海を渡りました。同じことを試みたエジプト人たちは、海に呑み込まれてしまいました。

マルコによる福音書 13章5～13節

⁵イエスは話し始められた。「人に惑わされないように気をつけなさい。⁶私の名を名乗る者が大勢現れ、『私がそれだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。⁷戦争のことや戦争の噂を聞いても、慌ててはいけない。それは必ず起こるが、また世の終わりではない。⁸民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、飢饉が起こる。これらは産みの苦しみの始まりである。⁹あなたがたは自分のことに気をつけていなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で打ち叩かれる。また、私のために総督や王の前に立たされて、証しをすることになる。¹⁰こうして、まず、福音がすべての民族に宣べ伝えられなければならない。¹¹連れて行かれ、引き渡されたとき、何を言おうかと心配してはならない。その時には、あなたがたに示されることを話せばよい。話すのはあなたがたではなく、聖霊なのだ。¹²兄弟は兄弟を、父は子を死に渡し、子は親に反抗して死なせるだろう。¹³また、私の名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・11月14日「降誕前第6主日」の日課主題は「救いの約束(モーセ)」。旧約聖書日課は、「出エジプト記」から、神からイスラエルの人々をエジプトから導き出す使命を与えられたモーセとアロンが最初のファラオとの交渉に失敗した後に再度、神から使命を告げられる場面。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、信仰によって生きた旧約の人々が列挙される中からアブラハム、イサク、ヤコブ、およびモーセについての記述箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、「受難物語」に含まれるいわゆる主イエスの「小黙示録」の中の冒頭部分。

旧約日課(出エジプト6章より)

・「出エジプト記」は、ヘブライ語正典「律法」の第二巻として置かれた文書で、「申命記」まで続く「モーセの出エジプト物語」の第一部に位置づけられる。「出エジプト記」の物語構成は、「モーセ誕生物語」(1~2章)をプロローグとして、「モーセ召命物語」(3~6章)、「十の災いと過越し物語」(7~12章)、「エジプト脱出物語」(13~15章)、「最初の荒れ野物語」(16~18章)、「シナイ契約物語」(19~24章)、「幕屋建設の指示①」(25~31章)、「金の雄牛事件と掟の板の再授与」(32~34章)、「幕屋建設の指示②」(35~40章)。

・日課箇所は、すでにモーセとアロンが神の命令によりファラオとの交渉に当たり、イスラエルの人々から拒絶された出来事(4~5章)が描かれた後に置かれており、モーセとアロンが神からの使命を再確認する場面となっている。しかし、この箇所は、3~4章の「召命物語」と対を成す内容で描かれており、3~6章全体がある種の「挟み込み構造」によって「召命物語」を構成していることから、必ずしも時間軸に沿って順に物語られた場面と見る必要はない。

・2節「わたしは主である。…主という名を知らせなかった」という神名啓示は、3:14~15の繰り返しとなっている。3:14では、モーセが名を尋ねるのに応じて(3:13)、神が「わたしはある。わたしはあるという者だ」という謎めいた言葉を告げるところから始まっているが、すぐに「主(ヤハウェ)」の名と共に、「これこそ、とこしえにわたしの名。これこそ、世々にわたしの呼び名」と神名啓示がされている。ただし、「主(ヤハウェ)」のみが神名として扱われているわけではなく、日課箇所3節にもある「全能の神(エル・シャダイ)」は、「創世記」の族長物語中で繰り返し神名啓示で用いられている(創17:1、35:11など)。なお、「主」と訳される「ヤハウェ יהוה」は、3:14「わたしはある(אהיה)」から派生した語であるが、ユダヤ人の習慣で、この文字「יהוה」をアルファベットどおりに発音せず、「主人」を表す「アドナイ」という音で読むため、訳語も「主」が充てられている。

・12節「唇に割礼のない」は、「口下手」を意味する慣用表現と考えられており、4:10に対応した内容である。

使徒書日課(ヘブライ11章より)

・「ヘブライ人への手紙」は、書簡に定型の冒頭挨拶文(差出人および宛先が含まれる)が欠けているが、末尾の挨拶文は残された、著者不明の書簡文書である。古くは東方教会を中心に「パウロ書簡」の一つとして扱われてきたことによって、最終的に4世紀末に正典として全教会的に承認された。1世紀末のローマのクレメンスが著した書簡で「ヘブライ人への手紙」からの引用が見られ、早くから教会間で広く流布していたものとみられている。にもかかわらず、早い段階で著者について「パウロ」以外の人物が取りざたされてきた(たとえば、初代教会のバルナバ、パウロの協力者シラス、同時代の宣教者アポロ、1世紀末ローマ教会の指導者クレメンスなど)。パウロが著者ではないと疑われてきた理由の一つは、本書簡が非常に格調高いギリシア語で記されていることにあるとされる。また、本書簡は、旧約正典「律法」の示す祭儀制度を踏まえて、イエス・キリストが真の「大祭司」として、かつ最終的な「犠牲の小羊」として、究極の「贖罪」を全人類のために成し遂げられたという、聖書に立脚した贖罪神学を展開している唯一の新約文書であるとされており、この点においても「パウロ書簡」ほか他の文書と一線を画している。

・日課箇所は、一連の「贖罪」神学に関する論を終えて、読者が「信仰」に拠って立つ生活を保つようにと励ましと勧めを述べていく中の一部で、11章全体が、旧約の主要な信仰者たちを順に取り上げることで「信仰」に生きる模範を示そうとしている。日課箇所でも取り上げられる人物の内、最初の「アブラハム」については、すでに8節から述べられてきている。日課箇所に限らず、11章全体を通して、取り上げられている旧約の信仰者の人物像は、必ずしも旧約正典文書の該当箇所の描出する人物像を正確に反映していない。1世紀のユダヤ教社会では、旧約の信仰者らについての通俗的な伝承物語が広く流布していたとされ(たとえば、モーセ昇天の伝承などは正典文書では述べられていないが広く受け入れられてた)、ハスモン朝時代(前167年頃の武装蜂起に始まり、前140年頃~前37年頃に王権確立。その後、形式的にはヘロデ大王が王権継承)以来の愛国的信仰至上主義(殉教礼賛主義)に彩られる傾向にあった。本書簡の旧約人物像も、「信仰によったか否か」の二分法で評価される傾向にあり、ここから、その後のキリスト教会における旧約人物像が逆算して(旧約文書に則らずに)形成されてきた嫌いがあるので、注意が必要である。日課箇所後半の「モーセ」の記述も、「出エジプト記」が描くようなモーセの葛藤や躊躇は顧慮されおらず、一種の「聖人化」された人物像となっている。ただし、そのような描き方にもかかわらず、本書簡では、彼らが「約束されたものを手に入れませんでした」(11:39)という立場を保持していることは見逃すことができない。

福音書日課(マルコ 13 章より)

・日課箇所は、「受難物語」中に置かれた主イエスの「小黙示録」の冒頭部分。共観福音書で共通して伝えており、場面設定も、神殿境内を後にされたときに、神殿建物の壮麗さに目を奪われた弟子たちの視座を変えさせるために主イエスが教えられた、というものになっている。主イエスは日課箇所直前で、神殿建物が崩壊する日が訪れることを予示されているが、実際にエルサレム神殿は、紀元 66~70 年のユダヤ戦争(ローマ軍がエルサレムに侵攻してユダヤ人武装集団を排除すると共に、町と神殿を破壊し、ユダヤ人を追放した)で破壊されて今日まで再建されていない。現代の聖書学者は、この神殿破壊の歴史的事実を福音書著者が知っていたかどうかを見極めることで文書成立時期を推定しており、「マルコ福音書」はユダヤ戦争前後(65 年~75 年のどこか)に編集されたことと推認されている。

・この場面について、共観福音書中「マルコ福音書」だけが、イエスの教えを聞いた弟子たちを特定している(3 節「ペトロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ」)。この 4 人の弟子たちは、主イエスの最初の弟子となつたとされる四人の漁師たち(二組の兄弟)であり、内三人(ペトロ、ヤコブ、ヨハネ)は、常に主イエスの側近的な立場に置かれていた弟子たちである(彼ら三人は、初代教会で「柱」と目されるようになったと考えられる)。

・共観福音書を比較したとき、日課箇所中、9 節「あなたがたは自分のことに気をつけていなさい」と、10 節「しかし、まず、福音があらゆる民に宣べ伝えられねばならない」が、「マルコ福音書」に特異な記述であることに気づかされる。

・9 節「気をつけていなさい(ブレポー)」は「注目する」という語義の言葉で、「マルコ福音書」で特に多用され、「小黙示録」中でも繰り返されている(4:24、8:15、8:18、12:38、13:5、13:9、13:23、13:33)。主イエスに弟子として従うということは、主イエスの視座を持って事柄を見つめ、洞察することとしても考えられているのである。

・10 節「福音(エウアングリオン)」は、四福音書中「マタイ」と「マルコ」のみで用いられる語で、特に「マルコ」が特徴的な用い方をしている(1:1、1:14-15、8:35、10:29、13:10、14:9。異本 16:15)。

来週の誕生日 (11 月 14 日~20 日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-355 番「主をほめよ わが心」(= I 76 歌詞)は、19-20 世紀英国の医師ブリッジズの作詞とされているが、原詞は英語ジュネーブ詩編歌集に収められたウィリアム・キース作の詩編 104 のパラフレーズ。曲は、J.M.ハイドン。

・21-57 番「ガリラヤの風かおる丘で」(= III 5 番)は、横浜指路教会で受洗し銀座教会員として長く歩んだ別府信男が中高生キャンプのために作詞し「ともいうたおう」の歌詞公募に応募して採用された歌詞に、カトリック信徒の作曲家・藤田尚晃が曲を付した。

・21-467 番「われらを導く」(II 22「みちからあふるる」歌詞)は、18 世紀英国のメソジスト牧師ウィリアムズ作のウェールズ語讃美歌が原作で、英語版ほか各国語訳で歌われてきた。曲は 19 世紀ウェールズの教会音楽家ヒューズの作。

21-355「主をほめよ わが心」**My Soul, Praise the Lord!**

1. My soul, praise the Lord! / O God, Thou art great: / In fathomless works / Thyself Thou dost hide. / Before Thy dark wisdom / And power uncreate, / Man's mind, that dare praise Thee, / In fear must abide.
2. This earth where we dwell, / That journeys in space, / With air as a robe / Thou wrappes around: / Her countries she turneth / To greet the sun's face, / Then plungeth to slumber / In darkness profound.
3. All seemeth so sure, / Yet nought doth remain: / Unending their change / Obeys Thy decree. / The valleys of ocean / Stand up a dry plain, / Thou whelmeest the mountains / Beneath the deep sea.
4. The clouds gather rain / And melt o'er the land, / Then back to the sun / Are drawn by His shine: / Whereby the corn springeth / Through toil of man's hand, / And vineyards that gladden / His heart with good wine.
5. All beasts of the field / Rejoice in their life; / Among the tall trees / Are light birds on wing: / With strains of their music / The woodlands are rife; / They nest in thick branches / And welcome sweet spring.
6. Lo, there is Thy sea, / Whose bosom below / With creatures doth teem, / Scaled fishes and finned. / Above, the ships laden / With merchandise go, / Nor fear the wild waters, / Nor rage of rude wind.
7. O God, Thou art great! / No greatness I see, / Except Thee alone, / Thy praise to record. / On all Thy works musing / My pleasure shall be; / My joy shall be singing: / My soul, praise the Lord!

21-467「われらを導く」**Guide Me, O Thou Great Redeemer**

1. Guide me ever, great Redeemer, / Pilgrim through this barren land. / I am weak, but you are mighty; / Hold me with your pow'ful hand. / Bread of heaven, bread of heaven, / Feed me now and evermore: / Feed me now and evermore.
2. Open now the crystal fountain / Where the healing waters flow; / Let the fire and cloudy pillar / Lead me all my journey through. / Strong deliv'rer, strong deliv'rer, / Shield me with your mighty arm; / Shield me with your mighty arm.
3. When I tread the verge of Jordan, / Bid my anxious fears subside; / Death of death and hell's destruction, / Land me safe on Canaan's side. / Songs and praises, songs and praises / I will raise forevermore; / I will raise forevermore.